中村俊定文庫
文庫 18
464

中村俊定文庫
文庫 18
464

山御書

序

いにしへの人は言葉の種をたづねすり言葉人形のくゝ研ぎ耕し筆を振るはしめ給ひ何のうやゝしき懲悪正あはれんを旨とせり詩歌連俳は四の句あり五七五の句は乃三句の句は唐様の趣を吹聚まいてこゝ先世にもて言語尓を寫の姿情を含む情

中村俊定

淵情共ふ様ことゝて雖乃家小
俳諧の言葉ふ犬子童子も
馬追ふ奴隷も仲てゝ知てく見て
堂のしまんハ例ま俳諧平話の
徳ちゝ舞ちゝ也俳諧平話も
亦ゝすゝへちゝゆきるハ也此此
慶詞家の主一二の見業の家
子給ふ冊子あり友人書堂
昌ちゝ梓ちゝもらんと乃ゝて

愚老ま告ゝ閲るま一篇の俳言海
蒲の後ちふゝ家竊ま詩仙歌
型の風肩ち模ま其言葉簡
易ありとも見仲の家一隅を
あ命て三隅を生ゝ峰乎
也書あり家ちゝ乎ゝ
後輩の潛様ゝ物ま持ま
明和唐寅仲秋東都の
旅鄙ま於て雖何ち彩

宇津の山の吾妻路の事ハ
はるゝ彼方言葉を尋て
墨畠沼乗来堂入初るゝ
ものなり

附言

一 茲一篇を摩訶寂光の石板なる所也是西席の
いと後二三子の門不ず業して道ず由るなきを
書堂石版いまゝ光光寺の名を窺ひといへども
幸ず今門牆の未ず有りてかゝる中一とあるず
ありうゝ里ちゝ雀通のあるより敢て私なく則
剞劂氏ず命じてかゝ拙を図めず傳ふ

一 近ゝ摩訶寂光寺の音を友の昌與
机上ずゝ言ゝ予ゝ問て通るず嘉永

[illegible]附録[illegible]且[illegible]相[illegible]る
古[illegible]一[illegible]の生る但白の傍に贅[illegible]只
集中光輝を[illegible]ん[illegible]ん[illegible]我[illegible]訂補を
加るよいと[illegible]あ[illegible]白[illegible]の[illegible]
[illegible]訪[illegible]処[illegible]を[illegible]
一巻末に[illegible]仙一編を載[illegible]
[illegible]集草稿の[illegible]一駢を訪[illegible]
五體三法の傳授を[illegible]
[illegible]同[illegible]二名の附[illegible]一帳

中の秘[illegible]古傳[illegible]
好[illegible]抱んと[illegible]は第三の物尾貂[illegible]
六[illegible]の數に満り白[illegible]の[illegible]編首の鹹[illegible]
[illegible]つる其軽重の味ひ[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]示[illegible]編中
[illegible]一拙千[illegible]を免さ[illegible]

其玉齋　書堂[illegible]

東都　摩訶窟珪山口述

夫れはいかいと称きはなんぞの作れるふ千しやすと欲は三十一文字みじかきは五言絶句といふも名字二十字にて詩情となるになんぞいはんや假名十七字にて風情を弁舌に述いふ様のしかれどもやさしきを守覚えさる童子婦女も知るありける我英須九などの左に擬するを案ずるに或ふ或日余に問ける詩家の古語傳録の故あるを俳諧にむかふに其格式あるにや答曰此道龍虎にして一百余年来経々の規矩あり数々の準縄あり先哲の俳書すでに粗

あらん行のまことに恥いすべき事と我聖語ふ
温故を知新可為師矣といへり懃勤まことにこんやこそ
仏法を俗耳に近きことはしと儒家の先哲御道の車夫
に同かるもとも仏道ふこんふ唐の十哲の書とを捜し求め
むいりしき神儒仏の為仏をいて白まひ出んをたうし
うしたとふる好くもあるまじ只ひとくよふにうこうこ尼あれも
よしはしらしとふまこ花を見ん風流もまこしいま
抜こ古辭古法ともりてのの格式とふこは詩歌文辞平懸
栗の白法あり奪胎換骨の格式あり 姚按とふを先作の

白を懸こ象こるの奪胎換骨とふを胎を奪ひ骨を換
とふことふ趙先生詠秋穫詩よ磨鏡似新月と作りこと
韓退こ新月似磨鏡と作りし持統天皇まこるこ歌よ
りしふぬの衣ちこふ天のかく山の待製を定ておこ大井
河かこぬかをきをのかこ ぬかよりこと衣ちこふ 此きこ人
あるこ口挽くこし 仏法の白まもきことをとりてんを
ちここふあり ちきちんをふりこ言葉を少ここあり
其こち多くこと葉をとりて心をここ さこ
後成マ和歌の行説こふ そこよ葉のいこ へをひて

心を一朝のわするゝしきなく人にもなり捨てらるゝも皆是
似我ぶるは心をとゞむることなくさるべきは形容和
らかならぬ所あれバなり根に待歌須文の詩をとり聖賢
賢傳のさゞ語をとりて我胸巾より生するおもむきなれバ古人の
糟粕なりたとへバ胡蝶の発句は荘子のことを思ひ
よせて蝶々や一かなの夢の舞ひなりとはいへば不知
周之夢為胡蝶與胡蝶之夢為周與周與胡蝶則必有
分矣此之謂物化 斯のごとくある荘子が斉物論の糟粕なり
是を 勝ちものの左右にひとり胡蝶ぞ舞ふ ふと／＼せば

糟粕にはあらじ荘周が蝶になりしをも蝶が荘周になりしを
もの形容をもしらば荘周が静坐に胡蝶の華に遊ぶ叢なる
一隠室なりと姿情をいひ出て発句になしなば荘
周がこのましき只老衰の人の懶息に耽りもうれ眠を得ぬ
折ふし胡蝶の音信て我の好む春の日をのぼりて其つれ
心叶んにや 子規の歌に拾遺集乃歌をいふよせんに
「歌にも似たり早しや」などとは「山吹」と
人といふとも所為にすり初音をきけるのさまをいくとあるが故
是其の汚さの似たり

わとくさ[illegible]事こゝ山路乃都
山家の庭は紅人を待しもるふるんう村るもんる
都おもうるる和音をゆゆくゆゆとい(るを)るを村る
一こゝ忘れる[illegible]るるふつゝとるいさとつん都る
をゆ隅田川ふゝをあるを紅を山路するを都るを蟬ゝたる白葉ゝ
紅葉の紅る　ゑのゝゝまちて緑とつる和歌をひとをふ
筏士の緑あし　茂る葉とは〳〵詠田川ふるみんて
流るありつゝるゝはるゝをかや絵ふん〳〵あし吹みむろ乃
山の紅葉をふ詠田の川のきちるる　とちゝゑ事のいま

〳〵より能因法師乃むつゝを古〳〵
緑をて月もつゝんちる紅葉
斯しをは〳〵糟粕を道ん月みゝををる一化和色
はふる　木ゝしの題ま陶淵明の四時の詩をおもひよせて
木ゝしや峯よかるゝ松の詩の口ずふる　松ゝ川　松とは冬嶺秀伝
木ゝしや　無法の琴の松むとる
ゑとをゝ絵ゝゑ草木ゝ陸葉古るゝ光ゝゑの松を世を低ゝ
ゑふして居るゝゝ　ゝ情のゝゝ　ゝ情をもゝせる一化ゝて

渕明か糟粕なるをしらし僣此の故なとゝいふハ志ありてのことの
やつし〳〵枕ことも唐のうたの俗にいふ計なるもなし
むかしくあるかなりにいふ花乃ちぎり
とりひ出ても童の物語もむかしくあいさとさと関東ことはに
いへる言葉とりし発句其いろは年々歳々花相似の詩の糟
粕を紡しらんか俳諧の句ハ仮名一二字のかはりしをもて
遊ぶるに此発句もなかく此二字なる糟粕にはあらし妻夜
秋冬とつゝくもていましえなりかゝるゆゑのふかきさるを
とは花の実と称せし句なり
爺々山婆ハ川なり　菊乃ちぎり

斯いひ出るもことは遊とも見え発句く爺ゞ山へ柴刈に婆ゞ
川へせんたくにとは唐くしく耳なれてをんなふたことなれと菊丸齢に
爺婆のうけ合山家隠幽のさまも動へるゆゑ変に賜給乃譬
喩をも説ん酒狂の人に對していふも酔なされさふといふと
酒のまぬ人乃戯を論はなひていふ御酔なされさふとい
謗り笑を含まさらん朝夕の德をも語りあひ出ても物に迷はし
るらぬれをかほかし翻按の句法あり奪胎換骨の格式
あり其姿情もまた源氏物語空蝉の巻にも
「としへぬる三十四十なかとかそへ　まかないよれまかりたへとし

この事ども又ゆゑ

ことゝのをとりてさらんをもとゝす

問子板や伊緣の伊緣の伊乃由りゝの數ゝ左八ツ右九ツ中十六ツの古ふるもあれハ碁石をかゝへるとい系つゝき數〻とふ紫式部乃文章ちゝんハ家まゝ羽子はゝかゝのをこ板まんゝ丸伊りゝ丸形容もあゝん 又法華經 方便品 如是因 如是緣 如是果 如是報 如是本末究竟等 此

ちゝ說をとり字ゝ言ゝ系をとゝ次

ちゝ小のくゝもかへゝてゝハ月 叔舟

生死と禍福もちへの意ゝ丸ゝ共ゝ究り麦ゝ等と いへるゝゝゝんを流ゝつる月永ゝ容をとりて夕へゝ 回〻日のくゝまかへゝてゝハ森羅万象心裏胸中も照ゝ

ゝかくのごとくかくゝ丸ごとゝ

骨孫楚謂王濟曰流泉可枕石漱流漱石欲枕石欲流漱曰流泉可枕石泉可嗽楚曰所以枕流欲洗其耳所以漱石欲厲其歯 この

ゝゝゝをとゝまてゝんをもゝ以

漱〻石と朱 うつて 夕まゝ 夏

枕流の餘 回あゝハ亀たゝ

ゝて乾ゝる石も言ゝ

立ちてしひてたゆたひ沒さしむる孤客涼風騷〻

萬葉集　沙彌滿誓歌　〻世間乎何物爾將譬旦開漕
去師船之跡無如　この

ちくさをとそもこの　言葉をとそ〻ひ

さたしくは赤らものふる　雲の上

孤のちりを世中のことは漕ぎ〻あのことく光陰不変も

あきものこと覩〻たるを雲のちりふ〻消も花のやと

あ〻ちるも天運循環と定るゆへあきはちりふ〻さ

ちく〻る我詞ゆゑ　ちくさの積りくる小舟漕ぎ

本〻紀鳴呼たくひなきを嘆ぶき〻孤客ふり捨乃孤

舟はなきまは言葉ゆゑ　ゆきたよく〻敬味熟後

〻〻さるを　又附句ゆゑ和文変化して高句へ

對〻て先ちるは　なるをを其ふ〻てよきもあり故る

を疑案〻ちるもあるを是も十ホ七八ゆ疑案の句

ゆゑ　ちくさのゆゑ　は

前句　梅ゆゑ　も　井ゆゑ　の　ゆゑ　浪

ちる　附句　伊勢物語を　ゆゑ　ゆゑ

妹背　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ　ゆゑ

一句の仕も有るなり「業平は[illegible]
斯句仕は附そこなひあるなり。色まして一句より胸中のさ
さやかにはあり
君ふるしてそこまさに棹入字
斯も世は附そこなひあるなり一句より蘇東坡
[illegible]
あるなり　といふるとそこをかりて一句を平生の仕ぶな
乃たそこなるもあるむ
前句　[illegible]
後の附句小李白の詩をうひまをて「萬戸」衣を[illegible]

秋の風　斯いひ出そこなひ附そこなひ一句も詩のごとくし
「軍」の笛もそこなひ破れ[illegible]き　斯句仕は附そこなひ
一句は仕ぶかあり
夫乃笛もそこなひ乃きあるものも
斯あるは「長安一片月萬戸擣衣聲秋風吹不盡總
是玉関情何日平胡虜良人罷遠征」ひそこなひ
一句は[illegible]
人のあるそこなひ女房のみさほをまて
前句　遥あるそこなひ扇の[illegible]

爰の附句に八幡源平の戦ひを引枝手
形次の5市々澄まず 物いひは附けても一句も盛衰記
を読むこと〜味方もの市ゝを引ふるる 斯句化
附こゝゝ故ゝ〜一句化こゝあて

桟敷ゝ〜5市ゝ矢文まゝ〜物ん

斯附ゝ遠まうやく扇ゝふすりむむ〜のおとも えぶし
ゝ〜めふ檀の浦の軍をゝひきぬゝひ艪櫂〜〜ゝ
あゝゝんもゝぬ人のゝ〜きゝゝ と語るゝ仙こゝむ事にゝり
ゝ〜んゝあるひゝゝあるひは舞妓の袖ゝふゝ〜

前句 宿ゝゝよりは借ぬ村〜〜

爰に附句は江口のゝゝひゝものを引ゝ物言
枝つゝ〜と西行ゝ歌 物いひ生〜ハ附ゝも一句を
あるゝに〜〜 世ゝ捨き〜〜四国位上人 かく句化
きは一句まゝ〜仏ゝあて

西り歌乃 物ゝゝゝ

斯附は かゝるゝ我ゝを〜む君ゝ郎 と流ゝ〜む
ゝ〜をゝひ柳の小雨もあ〜面白を懐中の筆ゝゝ生〜
ゝゝゝゝ俗僧士のきゝくひゝ〜ん 又古語を其まゝ乃附ゝ
もあり是ゝゝ句化と附句とゝ 俗の醜 酷あゝハ

一字も書そこなひ書きこと葉を附そこなひ奪胎換骨ともいへ

甚屋姿は

前句　りんむ〳〵平野も中千

附句　きらつき飛き乃紫伊緞ちを

清女ら枕草子に事葉を其まゝ附そこなひ二句共同じ

むし〳〵の夏そこなひるも志〳〵ぬいそ〳〵き人情ちゝむ

前句　志川ちの基盤ゆ花の有も事

附句　黄　鳥　一　声　酒　一　杯

李于鱗の詩をそこなひ附そこなひ二句共同そこなひの事を

看核と〳〵恋と色酒のむ雨辰の姿ちゝん　古人の附句も

弁論と先〳〵事ゆ屋る掛摩えとふ句

志〳〵川志ゆ〳〵ふく〳〵花のちゝ〳〵ん

紀友則の歌乃下の句を其まゝ二句共同そこなひ乃

金鞍玉輦を待ゆ艶ゆ変る様の不法ちゝ〳〵

生てきや川原〳〵宮の色花とふ発句

野〳〵の中〳〵たゝ〳〵かゝれ

兼ゆ歌ゆ法れ〳〵ものこと葉を志ゆ〳〵て二句共同ゆ取も

志ゆ〳〵吟ゆれゆ歌秋風の形容ちゝん加歌謡八曲芸の

附句ゆ〳〵て〳〵ゆ句〳〵ゆ附そこなひ仙佛ゆ句も

あるも一色にすしきんういるあるも安利くるもくへ〜ん孔ふ
暗誦〜て〜てくるへ〜ものへて附合此白はおの白新ちゝ此元
一巻の序破急連綿のごとゆ〜あれハ回〜紙向回〜白ゝて
おりのあ〜きも後日よきゝるものり回拙月伝すし中ふ百面白かしも
あ〜たゝ花の〜かゝ仮其中ゝ歳の治氣意愛すゝ定かゝ〜只其
間ゝ答てゝ〜ゝくの熟ゝを梅説ゝゝ〜〜拙ふ博聞強紀の
人の莞ふをゝ〜ゝ孔ゝも左右の童子の一典ともあゝんるゝを
誓ふゝ山王のゝゝくゝゝ孔木三萬三千三百の張の三毛哉
あけ言〜云爾

附録

水ゝは五湖ふ流ふゝゝ矣舟　野州梯北　吏舟

家語　江水始出岷山其源可以濫觴及其至於江津不方舟不避風不可以渡

ゝゝゝゝ岩ふくたゝ事ゝゝ多ゝ　吏舟

夕さんはくゝ多けゝゝ花ゝ　京本陽

岩ゝゝ岩ゝ波ゝゝ多ゝ峰ゝ　内侍

夕ゝはやまゝ雪のこゝゝ紙の袴　野州[illegible]　始白

源氏物語夕顔巻

よりてこそはるゝもゝめたるゝゝよ

おのゝゝこゝつる花の夕ゝ

無[illegible]ゝゝ[illegible]　始白

晉王子猷居山陰時夜雪初霽月色清朗詠左思招隱詩忽憶戴逵夜乘小船詣之經宿方至造門不前而反人問其故曰本乘興而行興盡而反何必見安道耶

夏ゝさゝゝや暦のゝゝ如里よさゝ　仝　亀童

山中無暦日寒盡不知年　太上隠者

雉子ふゝゝや妻もうゝれゝ麦畠　野及氏家　錦河

伊勢物語

むさゝゝ[illegible]ふゝなやきゝゝ[illegible]

妻もうゝれゝまゝ[illegible]

いそ〳〵の雨ふる〳〵言ふ事なれば　　正交寺宮　隼由

無門関　平常是道須日春有百花
秋有月夏有涼風冬有雪若無
閑事挂心頭便是人間好時節

我ゐ年〳〵せ〳〵置て様〳〵那　　仝　素的

年〳〵歳〳〵花相似歳〳〵年〳〵
人不同　　劉廷之

ちりかゝるやゆふへの雨ちる雫
春らけし庭のあさちふ風さえて　　仝　猶甫

枯葉ふもるもさゝなのいろ〳〵那　　賀侊公

短歌のまこと尽みあり　是乃　　仝　湖曉

秋の秋ちを書さものとはり〳〵合の
影見ぬ人のいろ〳〵あり　　能因

[illegible]

上京都岡　米室

[illegible]

涼山乃[illegible]　惟宗廣言

[illegible]寺[illegible]高あり春の[illegible]　仝　兎柳

花宮仙梵遠微〻月隱高城

鐘漏稀　李傾

[illegible]綿の[illegible]飛日あるも秋の[illegible]　奥羽村田得壽

秋風起テ兮白雲飛　草木黄落テ

兮雁南歸　漢武帝

[illegible]乃[illegible]　[illegible]の[illegible]赤婦人　遠及示用　拖司

司天主簿徐肇過蘓氏子德哥

者自言善ゆ返魂香但死經十

年已上則不可返矣

裏ゝ桶下やとふや　萩柳　遠江示用　呂竹

千代能

千代能けゝけゝ桶の庭ぬけす
ゝゝゝゝゝねたる月もやとりけ

全　兎園

盛久ゝゝゝ盛中ゝ扇ゝ那
ゝゝゝゝゝゝゝ　ちをれあり
那ゝ中ゝつゝ胡はゝ退生ゝ
盛久ゝゝゝろのゝちろやゝき

山更下ゝ松のちゝゝの暑ゝ那　全　蘆亳

春山無伴獨相求伐木丁丁

山更幽　杜甫

赤ゝとゝり爾ゝは居ゝゝ鶯ゝ武　上及お橋　麦輪

擧世皆濁我獨清衆人皆
醉我獨醒　屈平

八月の浪よりてこそ千鳥南　相及中田　魚尺

小夜ふかく浦はひろく流のこゑ　隠酬入道大政大臣

かゝふく月もさゝりて

蓮さくや彼こゝ詩〻月の門　仝　仙蔡

鳥宿池中樹僧敲月下門　賈島

沖〻も鷗鳥の羽風や江磨の秋　総及溝原　巴蕉

宮女如花満春殿只今惟有鷓鴣飛　李白

杉風の買人もふゝ〻附両り形　仝　巴水

六月買松風人間恐無価　白坡

達磨忌や池よりみちの一葉船　野州正方　不玉

碧岩録　舉梁武帝問達磨大師如何是聖諦第一義磨云廓然無聖帝曰對朕誰磨云不識帝不契達磨遂渡江至魏

新竹とあさとゝ言まゝ子の序　野及久我　不戚

擧頭望山月伍頭思故郷　李白

四月雨やえぬ北友の枕もと　野及半田　松齋

つゝとゝ浪さゝめゝ北月見ぬ書ぬ

新の京乃音をもとしこゝ　通俊

ちぢゝもゝや樓もとの柴ゝ　松齋

山虚風落石樓静月侵門　木角

音たうと　杉まつ[illegible]し　高　所百の形

深々ぬ[illegible]しく[illegible]れとと[illegible]る[illegible]ぬ[illegible]と　野叉半田　蘆川

清れるき杉小の[illegible]本の[illegible]し　慈道　法教王

一椀の形しまぬ中や河孫汁　蘆川

智山在二投子會下一為二柴頭投子

一日与二茶乃曰森羅萬象在二這

裡許一柴頭深却柔曰森羅萬象在二

什麼處一投子曰可惜一椀茶

誰夢の日本へ来てやうんこ多　仝　月風

うたゝ寝小夜長過ぎてもえつる多

夢さうて小る我ぬちり小雪　季廣

雪ふる花　俳句の不実や象の雪　仝　立風

北風湖上来雪片大如鷺　于鱗

其刺を後ふるに蘇の色

大智度論　破戒人譬如清涼池
而有毒蛇不中浴亦如好花菓樹
而多中逆刺上

野州庶治
文卓

三日月や漁さしのさまの小藻刈舟

書経武成　武王伐紂紂之前徒倒
戈攻于後以北血流漂杵

野州鯉名
鯉水

拜殿の祢宜さまの小刀時百

六根清浄祓　天照太神乃宣久人彼
則天下乃神物奈利須掌静謐心彼則
神明乃本至他利

武州新岡
乗把

鶯の日や枝伝ひ鳥の好きなる

科頭箕踞長松下白眼看他世
上人

野州栃木
丑明

王維

[illegible]

新勅選 [illegible]風 [illegible]嵐

[illegible]

武蔵 [illegible]田 琴[illegible]

[illegible]

花色如蕊栗俗呼為女郎聞名

戲欲契偕老恐悪衰翁首似

霜

源頌

眼下秋のとゝむふみ尾花ぶ　仝　祇翠

秋[illegible]ぬとめ[illegible]ぬ

[illegible]

敏行

垣張て周[illegible]へ入きく此も　仝　以秀

愛蓮説　菊花之隠逸者也　門茂叔

[illegible]

秋氏語　草木國土悉皆成佛

[illegible]人[illegible]次橋涼　音涼

方丈記　四くみの京の[illegible]絶[illegible]

一京[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蓮の愛やきらを[illegible]遠[illegible]　音涼

釋氏語　十萬億土去此不遠

[illegible]の朱を奪ふや窓の蛍　音涼

論語陽貨篇　子曰惡紫之奪朱也惡鄭声之亂雅樂也惡利口之覆邦家者

露のごとく泡もこれ女郎花　野州鹿沼　槿馬

金剛経一切有為法如夢幻泡
影如露亦如電應作如是觀

晩涼よあてのぬるまもなし麦の秋　槿馬

ゆらひよりゆけゆく涼のまきはは
ゆくゆく別のとらもはらハ　小侍従

いそつてよんちくも　柳乃風　野州鹿沼　くまの

古今集序　僧正遍昭ハ歌
さまは浮れたれども
たとしは終まをるをそなり乃ひと
つまよりとりもとのまうしと
和ひやむと我ハ　百柳　くまの

枕草子　ものはすれたる
ものの　まつのすゑ
二月の行ハ　柳乃風

人ずんも言ものいふて山話の郎　武江　聽月

穀梁傳　人之所以為人者言也
人而不能言何以為人言之所以
為言者信也言而不信何以為
言

ものいふたの笠ものいふ也相一義　如鏡

淮南子　一葉落而天下知秋

美殿乃馬はあくへふ柳郎　子文

公子風流嫌錦繡新裁白紵
作春衣金鞭留當誰家酒
拂柳衝花信馬歸　雍陶

猿よりも悲きものあり郎ひ　子文

楚塞餘春聽漸稀斷猿今
夕讓沾衣　竇常

寒食や飯焚ものゝ蛍たゝるる　松濤

春城無慶不飛花寒食東風
御柳斜日暮漢宮傳蠟燭青
烟散入五侯家　韓翃

相模乃嘘のうゝ　松濤

徒然草　ある人清水へまいり
給ひけるゝ道にて老たる尼のゆきつゝ
いひけるゝ由きゝもあへとも

屠蘇　雜煮のうゝ　宿の春　龜求

仲尼曰君子中庸小人反中庸
注中庸者不偏不倚無過不
及ゝ名

名月や色抜ふ御溝ゝ　龜求

却羨落花春不管御溝流
得到人間　李建勲

三月一火手拭ひの付て取ざる　海人

夜深吟罷一長吁老涙燈前

濕白鬚　白石易

責ての姿てらふ　種石く亀　山石

逸士傳　許由隱箕山無盃器以手捧水飲人遺一瓢得以掉飲飲訖挂於木上風吹瀝瀝有聲由以煩遂去之

妹うの家のつたふる紙鳶　普成

堀川院百首　むら君妹うの場まち

あなりつたふる董のこゝ言

初夜及夜と老をそゝふけ雪の音　晉成

老色日生面歡悦日去心今

既不如昔後當不知今　黄山谷

金箱のまくら浮り浄瓜　湖堂

今昔物語　近き世の僧に寛蓮といふ僧基の上人の弟子なり院に参り合の時に基の寛蓮が枕を取りて失りるを見て上人寄て退つ寄て寄りたく取て奪んとせるに寛蓮かまへてたく取まじらへ寄るかのまくらを懐より井に投入ぬ

五位　誘るらむこの夕べやさ笑の乃秋　岷石

千載集　漣やさ笑の乃秋はれぬるを
むらさめとなる海の緑の角

蓴や　何よりも魚の味　馬卯

晋陸士衡入洛請王濟に猜羊酪
謂曰吳中何以敵此答云千里
蓴羹未下鹽豉

瓜むらや　女あるべし　乃小長刀　文立

荀子　猶猶猜測河也形以戈
春秋也

白河の景物 書山

都をは嵐と共に立ちぬ
秋角くふくさ川の奚 自因

七酒のうち更ふかし十三夜 書

不是花中偏愛菊此花開
後更無花 元慎

山ふかしこのうるおも破れ窓 南

山ふかしれたるの淀乃おもかげ
ゆくをかきりよ春をまちん 頓阿

七 榎を一掉すゑ水 俳賀

無名抄 むかし為仲とふ人奥国の
住にて反の国アヒ郡に行
歌を形にて七枝「二合よ入る」
のちりうるとて

琴口

無[illegible]ひ鯉　魚藻

列仙傳琴高善鼓琴行消彭之術
浮游冀州涿郡間二百餘年後
於水旁設祠屋果乘赤鯉来祠
且有萬人觀之一日復入水去

白雨千　蛇も升し登りつめ　曰平

易乾為天九五曰飛龍在天
利見大人

二月山の桑もちの神あとも　女

柏木巻　[illegible]木より桑もりの神を
[illegible]へきなの木をへあ

白[illegible]　鏡の中　[illegible]し　女錦川

何来雙鬢雪五月鏡中寒便
欲煩君鑷蕭〻不可看　于鱗

雨の人云ふもきりて戻るより　書堂

あるもとの人のもとへふれは
云もこれをのもとへ見れ社　攝政左大臣

歌僊

白雲の間とも我見れふの月　普成

むこのしもかも新風論　玉山

世の中を新米喰て毒て起て　書堂

蕎と卵を庵ぬて八ふし　成

斧の音もこぬ椎柵　椿山

もくれを用ひる殿もなる　堂

桃灯もの移る天窓のりへは　成

さるまと涙も刑屋の配屋　山

俤塚は買れしうにと　堂

丑の瓜もれハ浮るたゝ　成

今あらゝと木蔭の見くぬたゝまゝと　山

鼻はすむと切敷のタら祢　堂

羽織ゝ着すゝ天狗も花よ多　成

嘘つき初も洒落齋ゝ　山

ちのへち畑ゝ来ゝをあれ見さん　堂

ちゝ汐蜆貝をとゝよ什地　成

差ちらかゝて丹本武者ゝ蛆　山

百日咳の夜ゝ来れゝも　堂

弱よ一文も言ゝこの富とゝろ　成

さるとも藤の孫の山井　山

軍兵も出ゝゝ陳ゝ丈ゝ屋　堂

二ゝ日おを悪しふさん　成

二三年見如ゝ醫ゝと顕ゝ　山

今夜の女房漬もの壓　堂

紅指裏も黄ゝむ晨朝乃ちつれ雪　成

嗚呼と鳥の杉ゝ嘆息　山

富士山よ頭ゝ絵ゝ　堂

可[illegible]ものを[illegible]る　成

[illegible]月の[illegible]陰家[illegible]て[illegible]ん　山

か[illegible]ま[illegible]ら[illegible]ハ[illegible]むし　堂

[illegible]ら[illegible]僧と[illegible]も[illegible]く[illegible]　成

二[illegible]ま[illegible]ち[illegible]と[illegible]ゆ[illegible]れ[illegible]　山

為代よ拍子[illegible]ん[illegible]　堂

[illegible]道[illegible]ね掃[illegible]ふ[illegible]　成

咲花の[illegible]ま[illegible]き[illegible]　コ

最七尺乃藤よ山ふき　堂

後序

今世の[illegible]の[illegible]事ハ[illegible]

[illegible]心[illegible]ハ[illegible]

[illegible]の[illegible]ひ[illegible]人[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ひて[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]山[illegible]井[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

下つけの圖宮のハ[illegible]

四條[illegible]

撞馬書

跋

[illegible]宮[illegible]遥[illegible]

[illegible]佛の[illegible]法[illegible]

[illegible]国[illegible]

[illegible]

[illegible]

是を思ふに八秋の清し
嘯傲を慰むるもの月や雪や
嘯傲を雪月を把ては乃ち故子
徳嘆也 于和庚寅之秋

叢菊亭 桑把

書林
日本橋通三町目
吉文字屋次郎兵衛